

W. Tigers P. 伝説のGSに密着!

ザ・タイガース

40年目の絆



67年、京都から上京してきた平均年齢19歳の5人組が日本中に旋風を巻き起こした。その名は「ザ・タイガース」。全国的女子中高生が彼らの虜となり、社会現象の頂点に立った。しかしその4年後、グループ内での確執もあって突然、解散を迎える。あれから40年——「沢田研二LIVE」に集結したメンバー。高校教師を経て帰ってきた瞳みのる、俳優・岸部一徳はベースを手に……。そして森本太郎が明かした還暦再会秘話とは

わずか4年の活動ながら、伝説のグループとなったザ・タイガース。独特のファンションでも話題を呼んだ。左から森本太郎、加橋亮、沢田研二、岸部一徳(当時の名前は修三)

東電「黒塗り報告書」に書かれ「国家機密」

恥ずかしい性癖 なぜ身につくか 147
日本のプロ野球は「飛ばないボール」を廃止せよ 47
斎藤佑樹と田中将大 初対決 観戦記 50
「俳句甲子園」に選ばれる 開成高校 俳句部「五七五の青春」 53
小倉昌男の「経営学」はなぜ売れ続けるのか 56

独占袋とじ 小回美奈子 誌上AV連続写真 181
女優論 13
「オタカラ」チマチヨリ! 都の西北、勝利の女神 NEWSワイド 165
松岡正剛 百選 百物自見 好評連載 うまいもの心味舌探偵団 198 196 168 166 165

「復興の書店」 稲泉進 134
「色懺悔」 女房殿のモンチサイ 142
「逆説の日本史」 井沢元彦 72
「時男」 藤原野矢 113 101
「マナ板紳士録」 やくみつる 101
「熱情金言」 「カインの裏サイト」 88
「恋文カウンセラー」 マキの真探ファイル 89
「医心伝身」 ホスト・ブック・レビュー 91 115
「ポスト・バスル」 162 ↓ 解答・プレゼント 93 99
「法律相談」 93

週刊ポスト 2011年9月30日
表紙撮影/渡辺通生
モデル/尾野真千子
編集/小倉昌男
監修/小倉昌男
発行/マガジンを創る
1981年11月4日生まれ。奈良県出身。97年、カンヌ国際映画祭カメラ・ドール受賞作品「夢の赤雀」で主演デビュー。以後、映画「クラマーズ・ハイ」ドラマ「火の鳥」(NHK総合)などに出演。10月3日からは朝の連続テレビ小説「カーネーション」(NHK総合、月～土8時)に主演する
■表紙デザイン/前橋理雄+tokyo synergetics
■本文レイアウト&校正/南ためのり企画
■装幀製版者/中山英

厚労省「カラ公事業」に血税3億5000万円が消えた

スキャンダル自民党が辿る「社会党への道」

野田内閣「屁のような醜聞」10大ニュース

雪だるま総理と不適材大臣たちは早くも泥まみれこんな内閣をヨイシヨイした大マスコミと財界は赤っ恥

新連載 人生の醍醐味を握る異人料理
みづらじゆん「死に方上手」 65
安部龍太郎「五峰の鷹」 76
「日本」
広瀬和生「蘭家のはなし」 70
鎌田實「シタバタしない」 69 70
大前研一「ビジネス新大陸の歩き方」 66 68
菅野綾子「屋敷するお化け」(増補版) 66
「ノンフィクション」
井沢元彦「逆説の日本史」 72
「ミステリー」
国友やすゆき「時男」藤原野矢 113 101
やくみつる「マナ板紳士録」 101
「ヒット」を創る「熱情金言」 88
「カインの裏サイト」 89
恋愛カウンセラー マキの真探ファイル 89
ホスト・ブック・レビュー 91 115
医心伝身 91 115
ポスト・バスル 162 ↓ 解答・プレゼント 93 99
法律相談 93

「タイガースの歌はっかりで、みんな全部タイガースです。この4人が集まると興奮してしまいます。」

沢田研二は語気を強め、こういい放った。ステージを盛り上げる派手な舞台セットや演出は不要だった。60年代後半に、日本中を興奮の渦に巻き込んだザ・タイガースのメンバー4人が静かに現われると、当時の女子中高生世代を中心とする5000人のファンは一斉に席から立ち上がり、黄色い声をあげた。

9月8日、東京国際フォーラムで初日を迎えた「沢田研二LIVE2011〜2012」(全38公演)。ヴォーカル・沢田研二(63/ジュリー)、ベース・岸部一徳(64/サリー)、ギター・森本太郎(64/タロー)、そしてドラムス・瞳みのある(64/ピー)がステージに立った。加橋かつみ(63/トッポ)と、療養中の岸部四郎(62/四郎)の姿こそ見られなかった。40年ぶりの歴史的なステージが始まったのだ。

メジャーデビュー以前、音楽喫茶で歌っていた頃からのレパートリー、ザ・ビートルズの「Mr.Moonlight」からスタートしたコンサートでは、かつて歌

われた洋楽と「モノリザの微笑」「青い鳥」といったオリジナル曲、全24曲が熱唱された。瞳の独特の跳ねるようなドラミング、乗りの良い岸部のベース、にこやかな森本……。「Satisfaction」では、森本と岸部が沢田の持つマイクに向かってシャウト。

「Justine」ではリードボーカルを務めた瞳が、40年間のパワーを爆発させるかのように派手に飛び回る。当時、ファンを失神させたといわれる指差しポーズでおなじみの「君だけに愛を」、それに続くアップテンポの「ジーサイド・バウンド」で客席のボルテージは最高潮を迎えた。当時と同じステップで、左右に跳ねて「ヨーバウンド」の掛け声をあげるファン。

「いろいろと不安もあったけど、本当に楽しいステージになりましたね。」

初日のステージを終えて、森本は嬉しそうにこういうと、笑った。

「まず最初に、サリーとピーと僕の3人で集まって音を出したのが6月半ば。でも、最初は酷かった。だって、「ジーサイド・バウンド」がだんだんバードみたいなスローテンポになっていくんだもん(笑)」



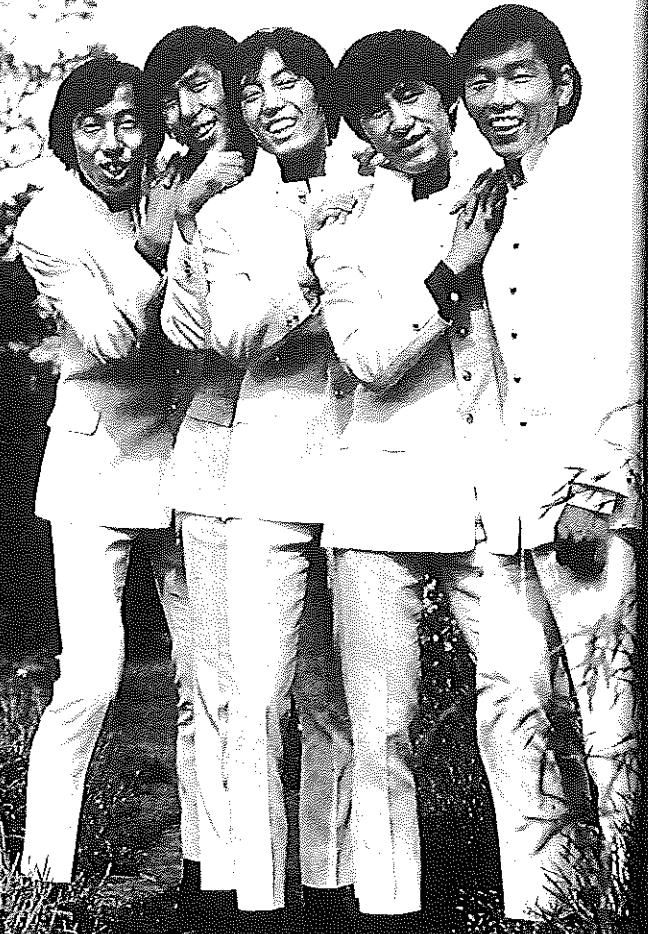
9月8日に初日を迎えた「沢田研二LIVE」は、解散から38年間、メンバーとの連絡すら拒絶していた瞳(右から2人目)を迎えてのコンサート。洋楽「Justine」ではリードボーカルにも挑戦すると、会場から愛称である「ピー」の大コールが湧き起こった(左から岸部、沢田、瞳、森本)

◇再結成、の陰にあった歓喜の再会と突然の別れ

8月半ばからは、沢田を加えて週5日、約5時間の本格的な練習がスタート。岸部は「楽しすぎてもう俳優に戻れないかも」と冗談をいい、カ一杯ドラムを叩きすぎた瞳を、「血圧が高いのに最初からそんなにテンションを上げて大丈夫？」と森本はからかった。

「4人で頑張って演奏を始めて、やっぱり僕らはタイガースなんだなあとしみじみ思った。40年たっても変わらない。こうしてまたみんなで集合できたことは本当に奇跡ですよ」（森本）

71年1月24日、東京・日本武道館で行われた「ビューティフル・コンサート」でザ・タイガースは解散。その後、81〜82年に「同窓会」と銘打ったツアーも開催されたが、今回のツアーには特別な意味がある。そこには瞳の姿があるからだ。



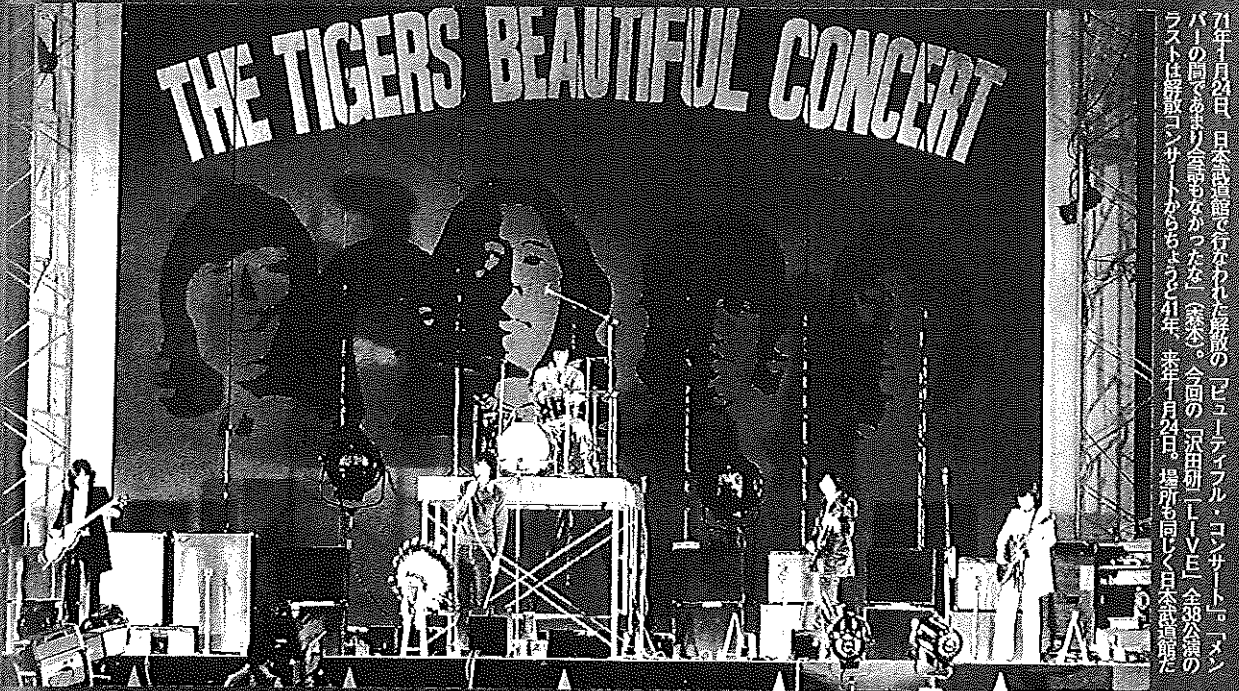
上海直後、東京・世田谷の島山でマネージャー・中井氏とともに合宿生活を始めた5人。「ザ・タイガース」の名付け親は作曲家のすぎやまこういち氏。関西出身ということに由来する



ザ・タイガースの前身、「ファニース」時代。沢田をボーカルとして迎え京都、大阪で活動する



歌手としての活動以外に「ジャポン玉ホリデー」などのバラエティ番組や映画などにも出演。「あの頃の平均視聴時間は3時間くらい」（森本）



71年1月24日、日本武道館で行われた解散の「ビューティフル・コンサート」。メンバーの間であまり合意がなかった（森本）。今回の「沢田研二」ライブは全米公開のラストは解散コンサートからちょうど41年。昨年1月24日、場所も同じく日本武道館

はなかった。森本はいう。「僕も、もつ会つことはないと思いきりあてていたから連絡をとることもなかった。ピーが決めたことをやり通す性格だよく知っていたから。だから中井さんから連絡を受けたときには信じられなかった」

「ピーが会うといっている」。08年、デビュー以来、ザ・タイガースのマネージャーだった中井国二氏が慶應高校を訪ね、瞳と再会。「メンバーをバラバラにしたのは事務所に従った自分のせいだ」と瞳に謝罪したことで、メンバーとの再会が実現したのだ。

08年12月、渋谷の和食店で森本、沢田、岸部は瞳と38年ぶりに再会する。

「ピーの顔を見た瞬間に、一緒に遊んでいた頃のことや、タイガース時代にケンカしたこと、そういうことをワーツと思いついて、涙が溢れてきた。ホントに嬉しかった」（森本）



洋楽の新しい情報をメンバーに伝えていた岸部四郎（写真右・当時の名前はシロ）を加えての新ザ・タイガース



67年8月に発売された3rdシングル「モナリサの微笑み」



GOOD-BY THE TIGERS
GOOD-BY PEE
GOOD-BY A-FELLOW MEMBER

THE TIGERS
その名は永遠に
輝き続ける
5人のトウ達よ
ありがとう



3週間と迫った8月17日、練習中のスタジオに中井氏の訃報が届く。森本が続ける。「『シー・シー・シー』の練習をしていたときです。沢田がマイクを使って、中井さんの訃報を告げて「休憩」とだけいった。誰も自分の場所から動けなかった。僕は俯いて泣くだけで、誰の顔も見られなかった。肝臓がんと脳腫瘍などが重なり、いつ亡くなってもおかしくない状態だとはわかっていました。だから覚悟はしていたんです。していただ、別れはつらい。デビューの頃から僕たちを面倒みてくれて一緒に合宿生活も送った。中井さんは僕らタイガースの兄であり、親であり、そして友達でもあった。今回、僕ら4人が再び集まることのできたのは中井さんのおかげです。中井さんがピーに会いに行ってくれたから実現できた。それなのに、どうして……。あと3週間あったら僕たちの晴れの舞台を見せてあげられたのに。必ず、中井さんのためにもツアーを成功させよう。今、僕らはそう思っています。誰もが待ち望んだステージを実現させた奇跡の再会と、涙の別れ。歓喜と哀しみの中で彼らは歌う。

▲71年1月24日の解散コンサート。わずか4年での解散劇に日本武道館は絶叫と涙で包まれた

▶69年3月8日、3日前に突如失踪した加高の除名を発表する会見。4日後には岸部の弟・四郎がアメリカから呼ばれ、加高に代わってメンバーとなる

「ザ・タイガースは音楽史、芸能史というより社会史に残るグループ。僕はすごくタイガースに感謝している」

こう話す森本。また沢田も今回の再結成について、「みんなが集まってタイガースに奉仕する」とファンに報告している。

67年2月、ジャッキー吉川とブルーコメッツ、ザ・スパイダースらが牽引したGS（グループ・サウンズ）旋風に音楽のごとく突っ込んでいったのが、ザ・タイガースだった。平均年齢19歳という若さ、品性知性を感じさせる甘いルックスと個性的な衣装、それまでのGSにはない新しさで過激さ。女子中高生を中心に日本中の若者が、ザ・タイガースという急性の熱病にかかった。

「僕のマリ」君だけに愛を」「花の首飾り」など次々とヒット曲を残し、68年には日本初のスタジアムライヴとなる「ザ・タイガース・ショー」真夏の夜の祭典」を後楽園球場で開催する。その異常な人気を何よりもよく物語るのが、「親衛隊」と呼ばれた熱狂的なファンの行状だ。森本が続ける。

「とにかく、いつも追いかけていた。テレビ局から出てくると、ファンがタクシーに分乗して追いかけてくる。みんなに住んでいた家にも常にファンが待ち構えているので、近所からクレームがきては引越す、という繰り返した。そういえば、四国のほうの温泉旅館に行つたときにみんなで風呂に入っていたら、笑い声が聞こえた。ふと見上げたら、天窓からファンの子が覗いていたなんてこともあったな（笑い）」

親衛隊の追っかけはエスカレート。コンサートの子ケットが偽造される事件や、新幹線のホームにファンが殺到、鉄道公安職員が出動する騒ぎも起きた。そんな中、娘たちを虜にするザ・タイガースに「不良」のレッテルを貼る大人たちも現われた。全国のPTAの多くが生徒のコンサートへの立ち入りを禁止した。

「よく覚えてますよ。ここにジフレリファンが集まって、『ジュリー』なんて叫んで。まるでライブの会場（笑い）。沢田が顔を出してよく怒鳴ってましたよ。沢田はファンの教育係だったから、追いかけても小突

かれたファンもいたな（笑い）」彼らの3軒目の住まいとなった目黒ハイツの吹き抜けに40年ぶりに立った瞳は、自分が住んでいた上階の方を感慨深げに見上げた。そこは解散コンサート朝、帰郷を決意した瞳が何物をもトバックに積み込み、日本武道館へと向かった場所だった。瞳が続ける。

「元々、僕らは遊び仲間からバンドを作ってプロを目指した。所属事務所やレコード会社からセレクトされた寄せ集めのバンドじゃない。リーダーが1人でみんなが従うような上下関係もない。作られたバンドじゃない。その分、エネルギーがぶつかり合っただけで間違えたら、がらがらと崩れるような危うい

バランスの上で音楽をやっていた。そこに花が咲く。それがタイガースだったんだと、この30年余りメンバーから離れて改めて感じています」



解散後も音楽活動を続けてきた森本は「森本太郎とスーパースター」を結成。「To My Love」J.S.T.「ROCK'N'ROLL」などのアルバムをリリースし、毎月、銀座・TACTでライブを行なう

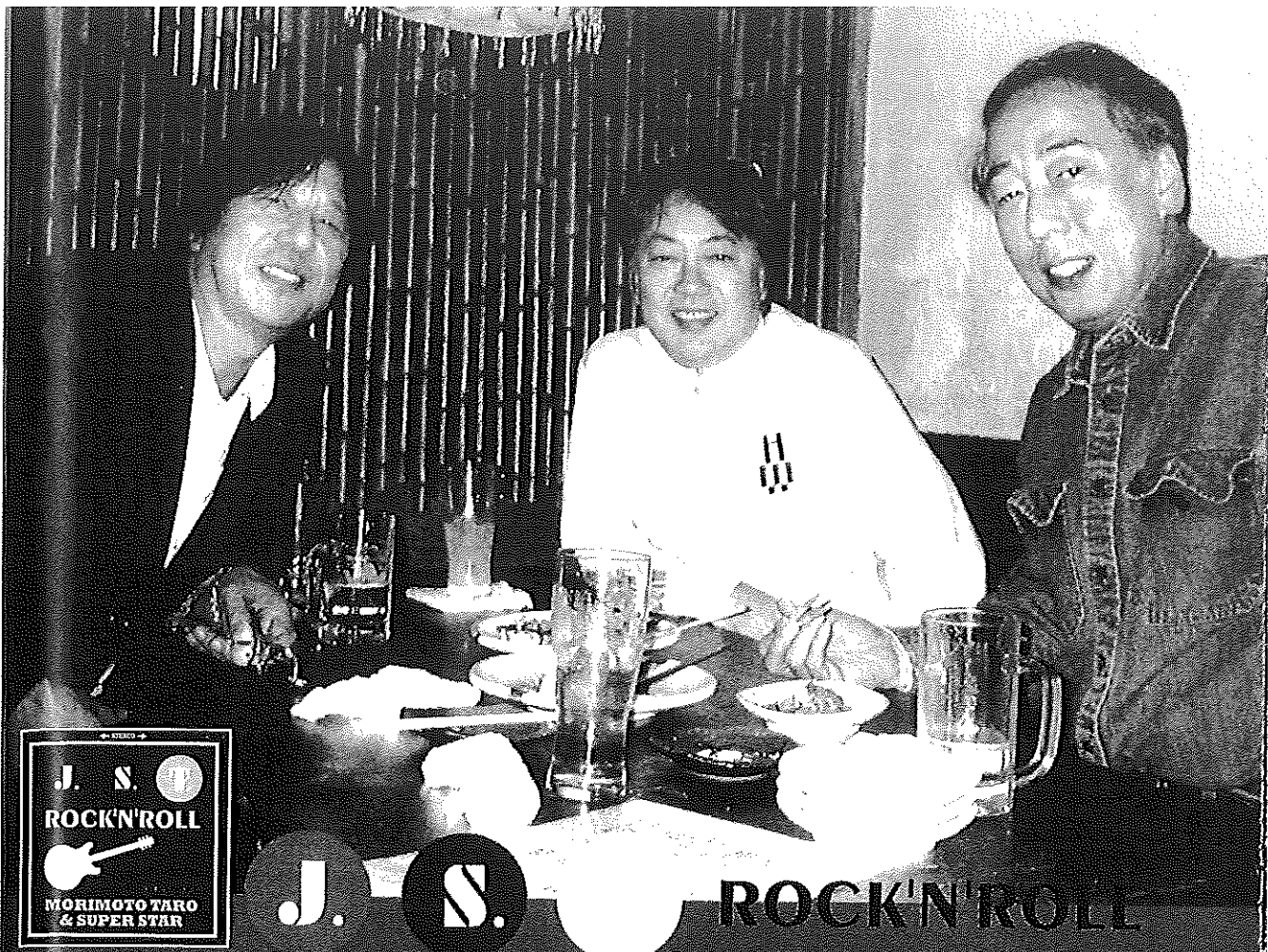
65年6月、京都の河原町で遊び仲間だった森本、瞳、岸部、加橋の4人が「サリーとブレイボーイズ」を結成したことから、その歴史は始まる。元々、瞳と岸部は同じ中学の水泳部、加橋は瞳と同じ高校に在籍していた仲だ。半年後の66年1月、遊び場だったダンス喫茶で歌っていた沢田をボーカルとして誘うと、プロバンドを目指して「フアンニス」と改名する。その翌月には、プロへの登竜門といわれた大阪の音楽喫茶「ナンバ一番」に進出。東京の大手芸能事務所、渡辺プロダクションの目に留まり、11月には上京。「サリーとブレイボーイズ」結成からわずか1年半での、ザ・タイガース誕生だった。

大卒の初任給が2万5000円だった時代、初めてもらった給料は6万円。2ndシングル「シーサイド・バウンド」の大ヒットで30万円に。その後50万円、70万円と月給は上がり、最終的な年収は1000万円を超えるほどになったという。

「ツアーが終わるころから彼らと同じようにひき合ってた」（森本）



目黒ハイツの三角の吹き抜けの中や建物の回りにファンが殺到。瞳がここを訪れるのは解散の日以来となる



▲06年、森本の還暦を控えた頃に撮影された写真が、アルバム『J.S.T. ROCK'N'ROLL』のジャケットに取められる。その中には瞳へのメッセージ曲『Long Good-by』が収録される

◀昨年3月、定年を2年残して33年間勤務した慶応高校を退職。その後、中国を拠点に音楽、出版活動などを始めた瞳は「いつか北京でザ・タイガースのコンサートを10万人規模とかでやるのもいいね」と語った

解散後、瞳は教職につき、沢田は歌手として一世を風靡。岸部は役者へと転身した。森本も「タローとアルファベッツ」を結成後、芸能プロに入社し河合奈奈子、西城秀樹らをプロデュース、現在は「森本太郎とスーパースター」を結成し、音楽活動を続ける。

そんなメンバーたちは還暦の年代を迎えた。この間も親交のあった森本、沢田、岸部は互いに還暦を祝い、沢田は岸部に赤いベースを、森本にイルカの形のギターをプレゼントした。

また瞳が還暦を迎える前年の05年には岸部と沢田が作詞を、森本が作曲を手がけた『Long Good-by』という曲が完成する。「最後のコンサートのあと、こんなに長い別れになるとは思わなかった。いつも君のことを気にかけている。「度々おまないか」連絡が途絶えた瞳に捧げる曲だった。そして、その歌を聞いた



瞳は返歌として『道』という曲を書いた。

「還暦という節目を迎えエールを送り合った4人は、ステージに立った。

「厳密には再結成とはいえないけれど、還暦をすぎたこうして集まった。昔の仲間と昔を思い出しながら楽しく好きな音楽を一緒にできる。とにかくそれが楽しいけれど、僕にとってもっと大事なことは来年1月、ツアーが終わった後のこと。彼らと同じようにつき合っていけるかというところ。このツアーで関係が終わりじゃ寂しい。いずれ、僕らには『死』という絶対的な別れがくる。その別れまで今のような状態でいたいんです。それは回数じゃなくて、会いたいと思ったときに会える関係でいたいということなんです」(森本)

華々しいステージを迎えたいばかりの森本の切なる願いは、飾らない、とてもシンプルなものだった。

冒頭の「沢田研」LIVE。 アンコールを含めた24曲を歌った4人は、止まらない歓声に応えるように再びステージに現われ、互いの手をとって掲げた。60を超え、友情を分かち合う笑顔はまるで少年のようだった。